

# 乳幼児期の子どもにおける垂直的越境交流と水平的越境交流の発達への影響過程の分析：読み聞かせ活動を通して

著者	奥村 桃子
学位名	博士(心理学)
学位授与機関	白百合女子大学
学位授与年度	2017
学位授与番号	32627甲第58号
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1630/00000019/">http://id.nii.ac.jp/1630/00000019/</a>



## 白百合女子大学 博士論文審査報告書

氏 名	奥村 桃子
学 位 の 種 類	博士（心理学）
学 位 記 番 号	甲第 58 号
学位授与年月日	平成 30 年 1 月 29 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	主 題 乳幼児期の子どもにおける垂直的越境交流と水平的越境交流の発達への影響過程の分析 副 題 読み聞かせ活動を通して
論文審査委員	委員長 教授 小林 明子 主 査 教授 田島 信元 副 査 教授 宮下 孝広 副 査 教授 高橋 貴志 副 査 准教授 眞榮城 和美

### 論文内容の要旨

近年、読み聞かせが子どもの発達に影響を及ぼすということがテレビや雑誌などの様々なメディアを通じて子育て中の母親をはじめとする世の中に伝わり、家庭内だけではなく多くの場所で盛んに読み聞かせ活動が行われるようになった。これまでの読み聞かせにおける研究では主に、読み聞かせ活動が親が与える言語刺激を子どもが身につけていくことで言語発達に影響を与えるといった教授・学習的な影響性に限られた形で明らかにされてきた。

一方、子どもの発達に影響を及ぼす社会文化的要因として、発達が子どもの諸経験に依存しているということから、子どもの学習・発達が生態学的環境論（Bronfenbrenner, 1979）の観点から盛んに再検討されてきた。中でも、これまでの研究で中心的に分析されてきた親子関係などの領域（「マイクロシステム」）内の活動に対して、家庭、近隣、学校など異なる領域＜間＞の関係性のあり方（「メゾシステム」）の貢献が強調されるようになり、ひとつの領域で経験したことを異なる領域で再体験することで経験の拡大・深化が展開するという「越境的相互作用」機能の重要性が叫ばれるようになってきた。

以上の越境的相互作用という観点から考えると、これまでの「マイクロシステム」内の分析も越境的相互作用という概念で再解釈できるのではないかと考えた。例えば、読み聞かせ活動において、親に読み聞かせてもらっていたのが、子ども自身でひとり読みをするようになるというのは、単に、親から与えられた体験を模倣することで自立化していくというのではなく、子どもの自身の理解の下にあった領域から親が示す領域に越境して再体験することで、読み聞かせ活動の拡大・深化をはかった結果だと考えられる。すなわち、読み聞かせにおける親の役割の領域を共有し、自らその役割を担うという「親役割取得・交代」を体験することで、読み聞かせ活動の拡大・深化を経て、自立化していくのである。こうした観点から、発達は一元的に「越境的相互作用を通して進んでいく」と捉えられると考えた。そこで、上記の Bronfenbrenner (1979) の「メゾシステム」の場合は、同時期の異なる領域間の相互作用、再体験であるので、本研究では「水平的越境活動」と呼び、親子間での「親役割取得・交代」といった越境体験を「垂直的越境活動」と呼んで区別したうえで、乳幼児期に行われる読み聞かせ活動を「越境活動」という観点から、両タイプの越境活動の実態、また、両タイプの越境活動の関連性、さらにそれらが影響を与える発達領域について明らかにすることで、乳幼児自身の積極的な自立的発達力のあり方を解明した

いと考えた。

しかしながらこれまでに、乳幼児期の子どもにおける読み聞かせ活動を「越境活動」という視点から分析した研究は見当たらないし、垂直的、水平的越境活動の統合的理解を示すものも数少ないのが現状であった。

そこで本研究は、乳幼児期の読み聞かせと子どもの発達の関係について、越境的相互作用という観点から、垂直的越境および水平的越境の現状と子どもの発達との関係性、また、両タイプの越境的相互作用の関係のあり方と発達への影響性について、保育園に通う0歳～5歳の子どもを持つ親を対象とした質問紙調査をもとに明らかにすることを目的とした。

具体的には以下のように分析Ⅰ～Ⅳの4つの分析を行った。まず、分析Ⅰにおいては、分析Ⅱ以降の出発点として、これまでの研究で主流であった「マイクロシステム」内での相互作用と発達への影響に関わる分析を行い、親の読み聞かせやかかわり方がどのような子どもの行動を通して子どもの発達が促されるのかを明らかにすることを目指した。具体的には、乳幼児期における読み聞かせと子どもの発達との関連と年齢段階差を分析した。その結果、乳児期・幼児前期・幼児後期の全ての年齢段階において、「親の対話的読み聞かせ」→「子の積極的参加」「子の絵本への興味・集中」→「言語積極的使用」「自立的・社会的行動」「対人関係」の発達、という関連性が認められ、「親のかかわり方」は、直接的に「子どもの発達」に影響を与えるというよりは、「子の絵本への取り組み方」に影響を与えることを通して促進させることが示唆された。

分析Ⅱでは、読み聞かせ活動において、「自立化の3段階」、つまり、最初は読み聞かせてもらっていたのが、徐々に子どもがひとりで読めるようになるという、「垂直的越境活動」を行っている状況について、子どもが親の役割を取得し、親と役割を交代して自分自身に読み聞かせるというプロセスを通ることを明らかにすることを目指した。具体的には、読み聞かせ活動における子どもの親役割取得・交代と子どもの発達との関連と年齢段階差を分析した。その結果、乳児期から、「対話的読み聞かせ」→「ひとり読み」→「家族に内容伝達」「内容の発展的学習」→「言語積極的使用」「数量・文字関心」「自発的表現活動楽しむ」という関連性が認められた。このことから、乳児期(0～1歳)から読み聞かせ活動において、「親役割取得・交代」が行われることが示唆され、それは、「親のかかわり方」→「親役割取得」→「親役割交代」→「子どもの発達」というプロセスで子どもの発達に関連をしていくことが示唆された。

分析Ⅲでは、家庭以外で読み聞かせを体験するという、乳幼児にとって家庭とは異なる生活領域の間を行き来する活動を取り上げ、こうした「水平的越境活動」が及ぼす乳幼児期の子どもの発達への影響過程を明らかにすることを目指した。具体的には、読み聞かせ活動における異領域間横断と子どもの発達との関連と年齢段階差を分析した。その結果、幼児前期・幼児後期でのみ、「子が図書館・児童館せがむ」→「子の積極的参加」「子の絵本への興味・集中」→「言語積極的使用」「自立的・社会的行動」の発達という関連性が認められた。このことから、「異領域間横断活動」は幼児前期から行われており、しかもそれは、「親のかかわり方」が、直接「異領域間横断活動」に関連をするというよりも、「異領域間横断活動」→「子の絵本への取り組み方」→「子の発達」というプロセスで子どもの発達に影響を及ぼすことが示唆された。

分析Ⅳでは、「垂直的越境活動」で得たものを再吟味・深化させることが「水平的越境活動」であり「垂直的越境活動」と「水平的越境活動」の両方が相互作用的に体験されることによって発達が促進されるという観点から、「垂直的越境活動」と「水平的越境活動」が乳幼児期の子どもにおいてどのように関連し合い、子どもの発達に及ぼすのかという影響過程を明らかにすることを目指した。具体的には、読み聞かせ活動における親役割取得・交代と異領域間横断の関係を、子どもの発達との関連の共通点、差異点から分析した。その結果、まず「親役割取得・交代」→「異領域間横断活動」の関連については、幼児後期でのみ、「親のかかわり方」が関連をしていくとい

うよりも、「子のひとり読み」→「子が図書館・児童館せがむ」→「子の積極的参加」→「言語積極的使用」「環境を通した遊び」「対人関係」の発達、という関連性が認められた。このことから、「親役割取得・交代」→「異領域間横断活動」は幼児後期になると関連を示し、「子の親役割取得・交代」→「子の異領域間横断活動」→「子の絵本への取り組み方」→「子どもの発達」というプロセスで子どもの発達に影響を及ぼすことが示唆された。次に、「異領域間横断活動」→「親役割取得・交代」の関連についても、幼児後期でのみ、しかも、「親のかかわり方」が関連をしていくというよりも、「子が図書館・児童館せがむ」→「子のひとり読み」→「子の絵本への興味・集中」→「言語積極的使用」「数量・文字関心」「環境を通した遊び」「自発的表現活動楽しむ」の発達という関連性が認められた。このことから、「異領域間横断活動」→「親役割取得・交代」は幼児後期になると関連し、「異領域間横断活動」→「親役割取得・交代」→「子どもの絵本への取り組み方」→「子どもの発達」というプロセスで子どもの発達に影響を及ぼすことが示唆された。

以上の結果より、読み聞かせ活動を「越境活動」という視点から捉え直すことにより、乳幼児期の子どもにおいても、子どもの積極的な「垂直的越境活動」、「水平的越境活動」が行われていることが示唆された。しかも、「垂直的越境活動」は乳児期(0～1歳)から行われ、「水平的越境活動」は幼児前期(2～3歳)に出現すること、「垂直的越境活動」と「水平的越境活動」が相互に関連をするのは幼児後期(4～5歳)になってからということが明らかとなった。これらのことは、乳児期(0～1歳)には「垂直的越境活動」、幼児前期(2～3歳)には「水平的越境活動」が活発に行われ、乳児期(0～1歳)には「垂直的越境活動」、幼児前期(2～3歳)には「水平的越境活動」の基盤作りがなされる。そして乳児期・幼児前期(0～3歳)にたくさんの越境活動経験を積んだ結果、幼児後期(4～5歳)になると「垂直的越境活動」と「水平的越境活動」は相互に関連し合うという力を発揮し、乳幼児期の子どもの基盤的で広範な発達へとつながっていくことが示唆されたと考える。

本研究において、乳幼児期の子どもにおける越境活動、しかも「垂直的越境活動」、「水平的越境活動」の存在を明らかにしたこと、さらには「垂直的越境活動」と「水平的越境活動」がどのようなプロセスを辿り発達に影響を及ぼしていくのかを示せたことは、人間関係の基礎が形成される乳幼児期の子どもの発達心理学研究において大きな意義があると考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

本研究の発端は、最近、子どもの発達への中核的機能を持つとして注目を浴びてきた模倣能力の発達について、個体内発達としてモデル化してきた古典的模倣研究に対して、社会文化的視点から捉え直すことで、模倣能力の発達が、子ども自身の積極的な社会文化的活動(越境活動)と、それを支える日常の養育者と子どもの相互交渉過程にあることを明らかにしようとしたことがある。この問題意識は、著者の日常的な実践現場から発したもので、最近の男女共同参画のうねりとともに幼少期から保育所に通う子どもたちの発達条件の吟味、また、自閉症スペクトラム児といった発達障害児における発達の困難さ、その基盤となると考えられる模倣の困難さを支援する立場として、健常の子どもたちの模倣能力の発達理論の見直しから始め、将来的に障害児の模倣の発達支援の理論と条件を見出していきたいという意欲的なものであった。それだけに、先行諸理論に対して物申すことになるので、それに見合うべく手堅い実証性を持ったアプローチが行なえているかどうかを最大限にチェックしつつ審査が行なわれた。

審査を通して認められた本研究のもつ成果と意義、課題を3点に渡って整理してみる。

(1) 本分析の結果から、乳児期(0～1歳)には「垂直的越境活動」、幼児前期(2～3歳)には「水平的越境活動」が行われ、幼児後期(4～5歳)になると「垂直的越境活動」、「水平的越境活

動」が相互的・相乗的に関連をすることが示唆された。このことから、乳幼児自身の積極的な越境活動が、発達初期から見られることを明らかにするとともに、保育園に通う現代の乳児期（0～1歳）の子どもから、児童期で見られてきた“越境”経験を豊富に積んでいることが示されたといえ、「保育所保育指針」でも述べられているような乳幼児期の子どもの基盤的で広範な発達に大きな影響を与えることを示唆した点は実践的知見としても評価され得るとされた。

（2）本研究は、今までは主に児童期以降でしか検討されてこなかった（水平的）越境活動について、人間の基盤的な発達がつくられていく乳幼児期から行われていることを明らかにするとともに、“越境活動”を、「マイクロシステム」内で行われる「垂直的越境活動」とマイクロシステム間で行われる「水平的越境活動」の2側面に区別し、統合を試みている点が新しい概念化として評価された。さらに、発達支援として基盤的と評価されている読み聞かせという活動を通して検討すると、「垂直的越境活動」「水平的越境活動」は最初から同時並行的に行われているのではなく、子どもの成長や発達に合わせて、まず始めに乳児期（0～1歳）の子どもの生活の基本単位である親との相互行為によって「垂直的越境活動」を経験し、「垂直的越境活動」で学習したことを自分のものにした幼児前期（2～3歳）になると「水平的越境活動」を経験できるようになり、さらに幼児後期（4～5歳）になると、「垂直的越境活動」と「水平的越境活動」が相互・相乗的に関連し合い、発達に影響を及ぼしていくという発達の視点の情報を提供したことは、新情報として高い評価に値するとされた。また、0歳代から保育園に通うということは、家庭では体験しきれない多くの人たちやモノとの関わりの中で、積極的に「垂直的越境活動」「水平的越境活動」が行われる重要な環境に日頃から参加し、様々な経験をしていることを示唆し、保育所経験の優位性を示唆するなど、今後の保育行政に与える影響は少なくない、といった評価も与えられた。

（3）これまでは乳幼児期の子どもの発達について検討する際、津守・稲毛式 乳幼児精神発達診断や新版 K 式などの発達検査を指標として扱っている研究が主であった。しかし、本研究では、子どもの発達を「保育所保育指針」における5領域の観点からの検討を試みている。この5領域を指標として乳幼児期（0～5歳）の子どもの発達を検討したことは新しい試みであり、保育園で行われている保育がこの「保育所保育指針」の5領域に則って行われていることから、乳幼児期（0～5歳）の子どもを対象とした発達心理学研究において大きな意義があると評価された。しかしながら、この点は、逆に、指標の信頼性、妥当性という点で課題がある点も指摘され、従来 of 諸指標との関連の吟味も含め、今後の課題とされた。

以上のように、本研究において、伝統的な個体主義的な模倣の発達研究に対して社会文化的視点で見直すことを提案したことは、単に、発達理論上の問題だけでなく、実践上、特に自閉症スペクトラム児といった障害児への支援という観点からも意義あるものと考えられた。論文構成上からも、実践現場でのケース観察からの仮説提起、健常児の典型発達状況の観察に基づく仮説検証という手続きをとり、最終的に、今後の課題につなげるプロセス・モデルの提起を行なっている、という点で、手堅い手法をとっていることが認められた。審査委員会では、上記の点を認めつつも、今後の展開に委ねるべき自閉症スペクトラム児ら発達障害児についての言及は、彼らの本質を捉えているとは言えないのではないか、彼らの支援を打ち出しているが、具体的な支援法にまでは至っていない、といった意見も出されたが、最終的には、今後の課題の出発点としての意義を認め、今後の議論、検証につなげていくものであることを確認するとともに、課程博士論文としては十分な要件を満たしていることを確認した。

以上により、審査委員会は本論文が博士（心理学）の授与に値するものと認めた。